

シニア世代の大学入学制度と学生支援

—「広島大学フェニックス入学」に関するアンケート調査をもとに—

杉原敏彦, 上田才節雄 (広島大学)

広島大学は、国立大学では唯一、出願資格を中高年者に限定した入学制度を実施している。募集人員の点でも、他の選抜に与える影響力の点でも小規模な入学制度であるが、昨今、「団塊世代の大量退職」との関連で注目が集まっている。また、青年層入学者の減少を補完する新たな入学対象者として、中高年者とその受入れに関心を寄せる大学も増えている。この入学制度の概要・ねらい・入学者状況等を整理するとともに、この制度に関する3種類のアンケート調査の分析等をもとに、この入学制度と学生支援の状況・課題を明らかにする。

1 フェニックス入学制度の概要

広島大学では、中高年層（以下、「シニア世代」という。）を対象とした入学制度をフェニックス入学制度と名付け、7年前から実施している。

この制度の特色は二つある。一つは、出願資格をシニア世代に限定した入学者特別選抜であるということ。もう一つは、この制度によって入学した人たちは、特別のコースやカリキュラムに従って学ぶのではなく、教務上、一般の入学者と同一の扱いを受けるということである。

また、選抜制度の分類としては、AO入試に位置付けて実施しており、選抜方法として、志望理由書等の出願書類の他、面接と小論文を用いている。

なお、本学では大学院課程についても同様にフェニックス入学制度を設けているが、本稿では主として学士課程について記述する。

2 フェニックス入学制度のねらい

2.1 制度創設に当たったの検討の経緯

フェニックス入学制度の設計に当たった当時

表 1 AO 選抜フェニックス方式実施学部及び選抜方法等

学 部	出願資格 年齢	選抜方法
総合科学部	満 50 歳 以上の者	小論文, 面接, 志望理由書
文 学 部		面接, 志望理由書
教育 学 部	満 60 歳 以上の者	小論文, 面接, 志望理由書
法学部 (夜間主)		小論文, 面接
経済学部 (夜間主)		小論文, 面接
生物生産学部	満 50 歳 以上の者	面接, 志望理由書

の学内教務委員会の記録等を読むと、制度設計の精神とこの制度に込められた期待の大きさを窺うことができる。まず、今後の高齢社会の中で人々がさらなる知的充実を得る機会を求めることは極めて自然なことであり、そうした中であって高度な生涯学習の機会を提供することは大学の果たすべき使命であるとの基本

認識が示されている。

また、わが国のめざましい発展を支え、企業活動や社会活動の中心となってきた人々が定年期を迎えるが、これらの人々の蓄えた専門的・技術的知見や実践的知識・国際経験等を、大学において学術的にまとめることは、個人の知的自己実現と同時に社会と文化の貴重な資産となるということも述べている。

こうした発想に立って設計されたフェニックス入学制度は、本質的に、従来の公開講座や科目等履修生制度とは一線を画すものである。

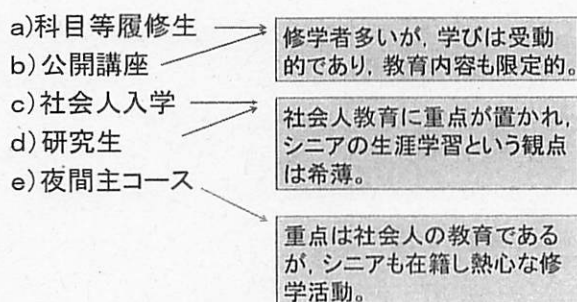


図 1 広島大学における社会人を対象とした教育活動の分類

当時、社会人等の受入れについては、図 1 のとおり、科目等履修生、公開講座、社会人入学、研究生及び夜間主コース等、学内に種々の受入れ制度があった。しかし、いずれの制度も一長一短あり、特に、公開講座を拡充させることによって所期のねらいを達成しようとする、体系的な教育内容を用意するために長期的で幅広い講座展開が必要となり、本学のみでそれを担うには大学の負担が大きいと判断された。こうして採用されたのが、当時、全国的にも例を見ない「正課教育としての高等教育プログラム」であった。つまり、入学者は正規の学

生、大学院生として修学するということである。総合大学である本学で開講される豊富な授業科目を、自己の学習歴・目的に応じて幅広く修学することが可能となり、修学内容・研究の十分な深度も保障され、修学者の充実感も深まることが期待される。さらに、修了証等ではなく、社会的評価の確立した学士の学位を目指すことも、入学者にとって大きな目標になるものと考えられた。

このように正課教育であることは、本学のフェニックス入学制度の原点であると同時に、さまざまな課題を内包する要因でもある。

2.2 制度創設前のアンケート調査

制度創設に当たって、2000年2月、シニア世代の学習ニーズに関する調査が行われた。対象は、本学の公開講座受講生のうち50歳以上の者及び本学卒業生のうち53～62歳の県内在住者である。対象者総数1,059名、アンケート回収数434名、回収率41%である。

アンケートの主な内容は、①仮に入学したとした場合、どのようなカリキュラムが望ましいか。②仮に入学したとした場合、学位の取得を望むか。③実際に入学する意志はあるか、というものである。

①どのようなカリキュラムが望ましいか、という点については、回答者の86%が「自分の関心に沿って自由に選択・設計するカリキュラムがよい」と答えており、「大学や学部で用意している既存のカリキュラムを学びたい」と考えている者は10%にとどまっている。

次に、②学位の取得を望むか、という点については、学士の学位の取得を望む者が10%、修士、博士の学位を望む者が14%であった。上記①既存のカリキュラムのニーズの低さを反映しているようである。

表 2 「フェニックス入学」創設前のニーズ調査におけるシニア世代の入学意向状況

	是非入学（学部）	是非入学（大学院）
男性	8%	5%
女性	12%	6%

③入学の意志については、表 2 に示すとおり、学部入学については回答者のうち男性 8%、女性 12%が入学を希望した。同じく大学院入学については、男性 5%、女性 6%が入学希望であった。いずれの課程とも、事前アンケートの段階では、女性の方の入学に対するニーズが高かった。

3 入学者の状況及び選抜

3.1 入学者の状況

上記のようなねらいをもって、学部にあつては 2001 年度から実施したフェニックス入学制度であるが、入学者数等に関しては、近年では毎年度 10 名弱の志願、5 名程度の入学という数で推移していた。ところが、2007 年度については志願者が一挙に前年度の 3 倍近くにまで増加し、その傾向は 2008 年度にも引き継がれた。団塊世代の大量退職に伴う大学入学志向並びにそのことを報じるマスメディアの影響が大きいように思う。現在、学士課程には 20 数名のフェニックス入学者が在籍している。

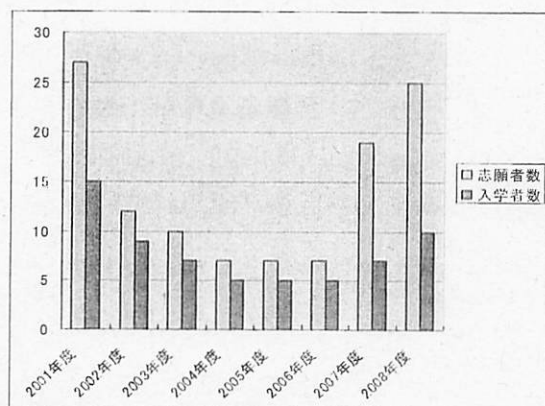


図 2 フェニックス入学の入学者数等推移

3.2 入学者選抜

2001 年度の制度導入以来、AO 入試によって入学者を選抜してきたが、2006 年度における本学の入試改革で、フェニックス入学をあらためて AO 選抜フェニックス方式と位置付けた。実際の選抜方法は、学部によって異同はあるものの基本的には、自己推薦書、小論文及び面接によって合否を決定している。先述のとおり、2 年ほど前までは、志願倍率も 2 倍に満たない状態であり、基礎的な学力と強い入学意欲が確認される場合には、入学が許可されてきたところである。

入学者選抜そのものと関連の深い学生募集の広報活動についてであるが、毎年 8 月に、一般市民対象の説明会を開催してきた。例年の参加者は 10 名程度であったが、2007、2008 年度の場合、参加者が 30 名を超えた。同時に、マスメディアからの取材依頼も相次ぎ、団塊世代の大量退職という社会事象を実感した。

4 フェニックス入学者アンケート調査

4.1 調査の実施

フェニックス入学を始めて 5、6 年を経た頃、毎年数人のボリュームで入学実績は続いているものの、入学後の彼らの修学や大学生活について、アドミッション担当者としてほとんど把握できていないことが気にかかっていた。そこで、入学希望者が一挙に増加する気配のあった昨年度、全学のフェニックス入学者学士課程在籍生を対象に、アンケート調査を実施した。

①調査時期 2007 年 2 月

②調査対象者 フェニックス入学学士課程在籍生 22 名

③調査内容 属性、入学目的、入学者選抜・学費・カリキュラム・学生生活等に関する

意見、今後の目標等の項目について、書面によるアンケート調査を実施した(調査様式は、自由記述に多くの紙面を割いた)。

4.2 調査結果

4.2.1 フェニックス入学生の属性

アンケートに回答したフェニックス入学生の所属学部・学年及び年齢構成は表 3、4 のとおりである。平均年齢は 63.7 歳であるが、出願資格として定めた年齢からして当然であろう。最も多いのは、60 歳代の前半であり、その前後の年齢層がそれに続き、まさにシニア世代の大学での学びのための制度となっている。

表 3 フェニックス入学生の所属学部・学年

	1年	2年	3年	4年	計
総合科学	1	2	—	2	5
文	2	1	2	2	7
法	1	2	1	—	4
生物生産	—	—	1	—	1
計	4	5	4	4	17

表 4 フェニックス入学生の年齢

年齢	在学者数
50~55	1
56~60	4
61~65	6
66~70	4
71~75	2
計	17

4.2.2 入学の目的

「入学の目的について述べてください」と自由な記述に任せたため、回答は特定のカテゴリ

一や尺度で区分しがたい、まさに思いのたけが述べられたものになった。その中で目についたのが、「定年を迎え」「定年を機に」「定年後の自由時間」というように、定年を区切りに学び直しをしようという決意である(4名)。また、特定の主題、学問について深く学んでみたいという入学の動機を記している人たちも多い(法学、英文学、和歌、知的財産権、言葉と心理・行動など、5名)。さらに、大学で学びたい、教養を高めたい、物事を順序だてて考えてみたい、など生涯学習の観点からの意欲もうかがえる(5名)。

4.2.3 入学者選抜制度(フェニックス方式)に関する意見等

シニア世代に適した良い制度である(4名)、負担が軽くてありがたい(2名)、よい試験方法(面接、小論文を指す)である(2名)など、回答者のほぼ全員が肯定的な評価であった。「長期に亘って受験科目の勉強から離れていた年代の者にはありがたい制度」、「学びたいという意欲を行動に結びつけてくれる制度」「社会を乗り切ってきた者であれば、一般受験生ほどの教科の知識はなくても大学生活を送るだけの能力はあると思う」のでこの制度を支持するなど、具体的で力強い意見が見られた。一方で、「若い年代(40歳代など)で学びたいと考えている人たちとの扱いの違いが大きすぎないか気になる。」と、出願資格年齢の拡大を提案する意見があったが、結局はこの特別選抜を実施する意味を大学自身が問われているように思う。

4.2.4 履修に関する意見等

履修に関する自由記述としては、授業科目の選択について、一般学生と授業内容が同一であ

る(相違する)ことについて、及び履修(修業)年限についての回答が主に見られた。授業科目の選択については、制度創設前の事前アンケートによれば大半の人たちが「自分の関心に沿って自由に選択・設計するカリキュラムがよい」と答えていたのだが、この度の質問で最も多かったのは、現状で「特に問題はない」という回答である(5名)。ただ、「履修制限を緩めてもらいたい。」(1名)や「一般教養科目が専門の内容に近ければよいのだが」(1名)という回答もあった。一方、「フェニックス生であることを意識したことはない」とか、「一般学生と同じ扱いを希望」という記述もあった。

次に授業内容レベルでは、「語学、体育の履修が一般学生と同じではしんどい」という回答(2名)と同時に「英語は大変だったが、一般学生と同じことを学ぶ満足感がある」(1名)などの記述も目についた。

また、履修の年限に関しては、長期履修学生制度を未実施の学部について、その導入を求める意見(2名)があった。

4.2.5 フェニックス入学制度に関する要望等

要望等については、特にないとの回答、無記述が最も多かった(7名)が、一方、回答にはさまざまなレベルの記述が見られた。

中で注目したのは、「入学者選抜上の配慮のみで、入学後の配慮がないように思う。」「フェニックス入学生同士の会合があればよい。」「フェニックス入学者専用の相談窓口を設けてほしい。」「ガイダンスをフェニックスだけで行ってほしい。」などの要望である。アンケートの随所に一般学生と区別のない扱いをという希望が見られる反面、このような要望を読むと、彼らは修学上、学生生活上のさまざまな思い・悩みを抱えているのではと思われるのではない。

5. 一般学生アンケート

5.1 調査の実施

フェニックス入学生と席を並べて授業を受けている一般学生は、この制度やこの制度を利用して入学しているシニア学生について、どのように評価しているのか知りたいと思い、2008年1月、アンケート調査を実施した。

5.2 調査結果

アンケート調査は、フェニックス入学生が学んでいる授業科目を履修している一般学生に直接アンケート用紙を配布し、郵便で回答してもらう方式により行った。回答件数は49件、回答率は32.7%である。

アンケートはフェニックス入学に関する回答者の自己評価(5段階尺度法)によるものとした。このうち、フェニックス入学生が学んでいることについて、「大変よいことだ」(評定5)から「よくないことだ」(評定1)までの5段階で評価してもらうと、「大変よいことだ」49.0%、「よいことだ」42.9%と、肯定的に評価する者が90%を超えている。また、フェニックス入学生が学んでいることは一般学生自身にとって意味があるかとの問いについては、「大変意味がある」22.4%、「意味がある」51.0%である一方で、10.2%の者は「余り意味はない」もしくは「意味はない」とした。(図3参照)

次に、フェニックス入学生に次のようなことをしてもらいたいと思うかとの問い(5段階尺度法)については、(1)「さまざまな人生経験について話を聞きたい」は、「是非、聞きたい」と「聞きたい」者が71.4%、(2)「職業生活等、就職活動等の参考になるような話を聞きたい」者は77.6%、(3)「人生の先輩として、いろいろなことの相談に乗ってもらいたい」者は、

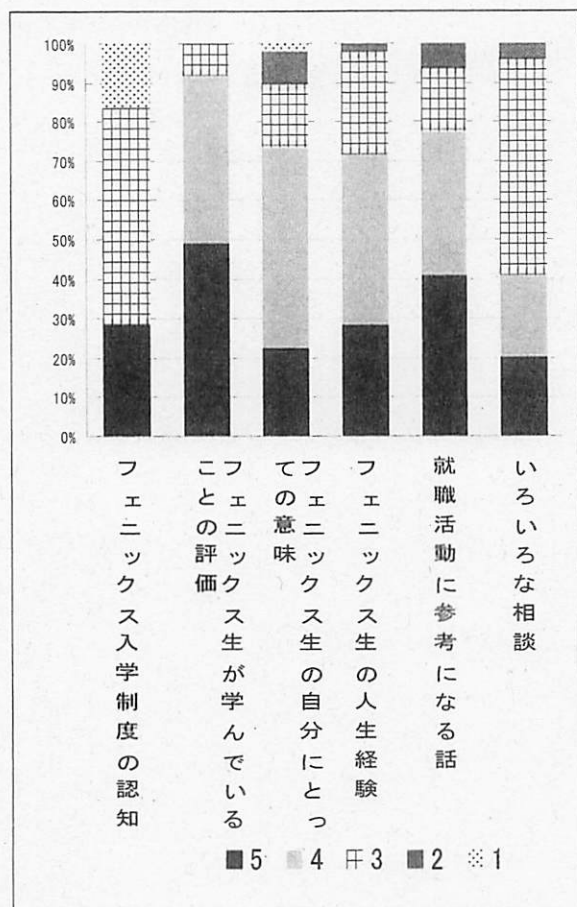


図3 一般学生のフェニックス入学に関する評価

40.9%であった。一般学生は、フェニックス入学生が学んでいることを相当高く評価している一方、自分自身にとっての意味付けについては、若干評価が低いようである。しかし、フェニックス入学生の話聞いてみたいという気持ちは、特に職業生活、就職活動等の話題に関して高い。

6 課題と展望

上記のアンケート調査の結果等をもとに考察すると、シニア世代の入学制度を実施している本学では、この制度の充実及び入学者の学生支援に関して以下のような課題があると考え

る。

近年、志願者増加の傾向が現れているが、受入れ人数自体増加しないままに志願者数が増えると、単にこの選抜が難化するだけになるおそれがある。一方で、受入れ学生数の増員に関して全学的な合意が得られているわけではないのが現状である。

特別選抜として学生募集を行うものの入学後の修学は一般学生と基本的に区別のない正課教育を原則とするのが、この制度の眼目である。フェニックス入学生自身そのことを望んでいるという調査結果も出ている。しかし、修学上、学生生活上の悩みを抱えながら他に相談できずにいるフェニックス入学生の事例も報告されている。正課教育の特質を保ちながら、一般学生とは異なる修学支援を実施する工夫が求められる。そのための一つの取組みとして、フェニックス入学生の総合的な支援・対応窓口を創設することも考えられる。

しかし、このような取組みには人的・制度的なコストがかかることは自明であり、入学者数に着目する限り、少数者の制度にどこまでコストをかけるか悩ましい問題である。ただ、現状においては少数入学者のための制度ではあるが、今後の活用によっては、一般学生への好影響も計り知れない入学制度ではないかというのが、現時点での希望である。

参考文献

- 杉原敏彦 (2007). 「大学におけるシニア世代の学び支援」『図書館雑誌』101 (4), 224-225
- 出相泰裕 (2008). 「生涯学習支援部門研究活動報告」『教育実践研究』第2号, 59-68